

21世紀の日本惑星科学会の使命

本号は21世紀の最初の「遊星人」である。この記念すべき号の巻頭言として、21世紀の日本惑星学会の夢を描いてみたい。

まず21世紀の最初の10年はわが国の惑星科学にとって大変重要なものとなることが予想される。それはこれまで日本の惑星科学者が長年のあいだ待ち望んでいた惑星探査が我々自身の手によって実施され、惑星の観測データを直接解析出来るようになるからである。まず2002年にはMUSES-Cが小惑星サンプルリターンを目指して打ち上げられ、2003年にはLUNAR-Aがペネトレータを使った月内部構造の探査のために打ち上げられる。2004年初頭には「のぞみ」が火星の周回軌道に投入され、火星上層大気探査を始める。また同年、宇宙科学研究所と宇宙開発事業団の共同ミッションである大型月探査衛星SELENEが打ち上げられる。2005年にはMUSES-Cが小惑星1998SF36に到着し、2007年にはそのサンプルが地球に持ち帰られる予定である。さらに2007年には金星大気探査が、2009年にはヨーロッパ宇宙開発機構との共同で水星探査を実施する計画も練られている。これらの月・惑星探査ミッションはこれまでの諸外国の惑星探査のいずれをも凌駕する新しい観測データをもたらすものであり、月・惑星の起源と進化にあらたな光を与えることになるだろう。

一方、国立天文台の「すばる」望遠鏡や電波望遠鏡は太陽系外の惑星系や生まれつつある星の精密な観測を可能にしつつある。これらの観測結果は我々の原始太陽系の構造と進化について、さらに新しい考え方を要求するようになるだろう。惑星探査によって比較惑星学が生まれたように、これらの天文観測は比較惑星系学を生もうとしている。

まさに21世紀の日本の惑星科学では、どちらかというところまで立ち後れていた観測的研究が飛躍的に進展することになると思われる。これまでわが国が得意としていた理論的研究、物質学的研究、実験室での実験的研究とこれらの新しい観測学的研究を統合する新しい時代がすぐそばまで来ている。このような様々な研究を有機的に結びつけて惑星科学に新しい時代を築くのが、21世紀の日本の惑星科学界の大きな使命であろう。日本惑星科学会はまだその規模は小さいが、それゆえにこの学会を色々な分野の進展を取り入れた有機的、総合的研究を進めて行く有効な場にすることが可能である。将来の日本の学術行政体制が不透明な現在、日本惑星学会を新しい時代の惑星科学者のはつらつとした議論と活動の場にしたいものである。

水谷 仁